

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 ゾンターク ミラ

ゾンターク ミラ氏の「大正期日本における合理主義と救済——1918～19年のキリスト再臨待望運動の「厚い記述」」は、新たな方法論に基づき、日本のキリスト教指導者による大衆布教運動の宗教思想史的意義を捉え返そうとした業績である。ゾンターク氏は、宗教に関わる「言説」を探究する「言説宗教学」について周到な方法論的考察を行い（第1章、第2章）、その上で内村鑑三が中田重治、および木村清松と協力して立ち上げた「再臨運動」という1年ほどの出来事の経過について言説分析の観点から論じていく。

「言説」分析とは、「現実」が社会的に構成されたものであるとし、言説の向こう側にある「実在」に焦点を当てるのではなく、言説構造の変化を明らかにすべく、その機能と文脈と形態を問うものである。宗教学者は主要な宗教的言説パターンの主張者、聴衆、他の関与者、また彼らを取り巻く社会的条件や宗教思想史的背景につき、できるだけ分厚い記述（クリフォード・ギアーツ）を積み重ね、ある範囲の宗教的言説の意義を問い、宗教学者としての社会的責任を果たしていこうとするのだと論じられる。

中田重治（1870-1939）は日本のホーリネス運動の大立て者として知られるが、これまでのところその宗教思想史的研究は乏しい。また、組合教会に属したが福音派的な立場に立って世界各地で活躍した木村清松（1874-1958）についての研究はほとんどなされていない。中田と木村はともに、都市民衆を担い手とするアメリカ合衆国のリバイバル運動を目の当たりにし、それを日本にも広めようとした人々だ。彼らはいかにして効果的に救済信仰を促すかに熱意を傾け、人情味があり話術の才が豊かだった。彼らは知識人の側で高まりゆく合理主義的な言説のあり方には距離をとって、大衆布教者の道を歩んでいた。

他方、内村鑑三（1861-1930）は文明の進歩を支える宗教としてのキリスト教と科学者としての独自の進化論理解とを結びつけていたが、家族の悲劇や帝国主義への失望を経て、合理主義的なキリスト教理解を乗り越えようとしていた。それぞれの思惑をもった3者がどのように出会い、講演を行い、行動したかが詳細に描き出され、「合理主義」「救済」「生命」をめぐる宗教的言説構造の変容の徴候として解釈されていく。

前半の方法論も後半の日本キリスト教思想史も焦点の周辺のみが狭く取り上げられ、両者は必ずしもしっかりと結びついていないのは本論文の弱点である。しかし、方法論と事例研究のそれぞれにおいて堅固な手順により独自の貢献がなされ、とりわけ大正期日本の再臨待望運動の叙述には多くの創見が盛り込まれている。知識人の動向と民衆キリスト教の展開を複眼的に捉え、合理主義をめぐる日本キリスト教思想史の転換点を印象深く描き出した功績は大きい。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。